日本さんのお手伝い！

海記　龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日本さんのお手伝い！

【Ｎコード】
Ｎ０１１３Ｑ

【作者名】
海記　龍

【あらすじ】
彼女は『国』である日本の妹的存在な子供に！一応武術を習っていたため結構強い！日本と一緒に頑張りましょう！　…そんな感じです。

まず始めに（前書き）

どーも、初☆投稿＆連載のリュウです！
文才なしの超初心者ですが、よろしくお願いします！
えーっと、まずは基本の登場キャラ紹介でしょうか？

まず始めに

登場キャラ

主人公
名・川中志希（しき）
性別・女
年齢・…？
身長・１５４ｃｍ
体重・さ「書かせるかオラァっ！！」
顔・日本の髪を伸ばしただけです（肩に触れる程度）
性格・上と認めた者にはとことんついて行く、犬みたいな感じ。
・でもほかにたいしては横暴。
・口調が男のようだが日本の前では猫かぶり。敬語。
武器・日本と同じく刀。たまに銃。
一人称・日本の前では『私』　いないところでは『オレ』

そのほか、日本はもちろんイタリアやドイツなど、だいたい中心のやつらは出てきます。

まず始めに（後書き）

よろしくお願いします！

最後の日！？

お？

トコトコトコ……（ダダダッ）

ども、はじめまして…だよな？　うん。
オレは川中志希。
変な名前だよな～。どうせ、母親たちがめんどくさがっただけなんだろーけど。
『　　！』
…後ろ、うるせーだろ？　あれ、（自称）神なんだ。
あんな奴が神って、世界終わりだろ。
『　　』
…で、まあ状況説明。（無視！？）
オレは死んで、ここは神の世界……らしい。
あー、死ぬならさっさと地獄でも天国でも連れてきゃいいのにな。
死んだって感じはある。体が生きてた時より軽いし、第一、さっきものすげー痛かったし。
分かりにくいと思うんで、そん時のこと、見せてやるよ。

「あ～、ダリぃ～。」
これがオレだ。（当たり前だが）このあと死ぬなんて思っちゃいない。
学校行って適当に授業受けて帰ってきて、メシを食う。
こんなのがずっと続くと思ってたんだ。
…あ、やっぱ見せない方がよかったな、オレの死に方。
「さ～てと…。」
ここで本をだす。オレは本が好きだ。どちらかと言えばマンガが。
母さんによると、『志希は本読んでる時が一番うれしそう』らしい。
まあ、確かにうれしいが…。
「ぐおっ！！？」
ドカッ（いや、ボカッ？）

これは、電柱にぶつかったんだ。
本に集中しすぎて前を見てなかった。…というより、電柱なんて見えなかった。

ドゴッ

はい、これは地面にぶつかった音～。
もちろん、地面はコンクリートで超かたいので、後頭部に直撃して血がダラダラ。一気に灰色の地面を真っ赤に染めた。

「ちょ、ちょっと、大丈夫！？」
「誰か来てー！！」
「救急車呼んで！！」
誰かが呼んだ救急車に乗せられて、そこでオレの意識は途切れてる。
たぶん、病院に運ばれている途中で死んだんだろう。

……あ、そういや、誰かがこう言ってたな。

「悪いな…志希。」

…って。

最後の日！？（後書き）

ちょっと、ここまでにします！
あ、志希が呼んでた本はマンガです！本当は校則違反になってるんですけどね…。

さあ、最後につぶやいた言葉の意味は！？
誰が言ったのか！？

どうぞ、お楽しみに！

ところで、忘れてましたが、できれば…感想などよろしくお願いします！！
リクエストなども物語が進むにつれて募集しますので！！

神とご対面♪

『早く目覚めろよ……志希。』

――――――――――――――――――――――――――――――――、

「ん…。」

おっ、起きたようだぜ、数十分前のオレが。

『よう、起きたか？　志希。』

ダッ

ボカッ

バタッ

分からないだろうから説明しよう！

ダッ＝オレ・志希が声の主のもとへ走りだした音。

ボカッ＝声の主の頭をなぐった音。

バタッ＝声の主が倒れた音。

（音について、間違っていると思うのでできるだけスルーで　ｂｙリュウ）

…分かったな？

この後、オレは声の主の腹の辺を踏んだ（踏みつけたともいう）。

『ぐえっ！』

「キモい声出してんじゃねーよてめー。見たところ顔はいいんだか

ら堂々としろや！」
『なんか違うって！』
「うるせー！！」
この時オレはこいつで現実逃避していたと思う。でも…、目覚めてから一番最初に会うのがこいつとは、なんか（直感で）いやだと思った。

あの声の主をボコボコにした後、驚異的なスピードで回復した声の主から、オレは信じられるような信じられないような事実と依頼を聞いた。

『オレは神だ。志希、お前には「ヘタリア」の世界の日本と一緒に生活してほしいんだ。』

神とご対面♪（後書き）

はい、第3話です！　どうでしたか？
おもしろかったでしょうか！？

……はいすいません。気持ちが高ぶりました。
まあ、おもしろくてもおもしろくなくても、意見などをくだされば
うれしいです！

あ。（思い出した）

意見などとともに、感想もよろしくお願いします！

ベタな事実と意外？な事実（前書き）

今回は途中まで三人称ですね。書いてたらそうなりました。
っていうか、４話まで来てまだヘタリアの世界までいっていないってどんだけ！？
……文才の無さがはっきりわかるいい例ですねっ！！

ベタな事実と意外？な事実

……。

無言。

どうやら、志希は意外な事実を言われたので固まってしまったようだ。

「ちげーよ、あまりにベタな展開だからだ。死んで神の世界いってマンガの世界いってこいなんて、超ベッタベタだろ。」

…はい、すいません。まちがえました。

『おーい、どうなんだー？』

「うるせーぞ。」

おぉっと！！　志希は（自称）神を睨みつけた！！　（自称）神、志希の本気の殺気に動けない！！　っていうか、まだ子供なのになぜ殺気が出せるか絶対考えてる！！

…そうですね、私も気になります。志希、答えてください！

「オレの家で教えてもらった。」

『どんな家だよ！！？』

――――――――――――――――――――――――――――――

――

とまあ、こんなところだな。

まだ見ててくれよ？　これからが面白いと思うから。

「で？　お前、神なんだって？」

『はい。』

「…そんな歳で誰にでもすぐウソだとわかるウソついてんじゃねーよオラアッ！！」

『ウソじゃないってばーっ！』

そうだ。

「敬語だ。」

『え？』

「お前、これからオレにたいしては敬語使え。敬語だったらお前が神だって認めてやる。」

『はっ、はい！　分かりましたっ！！』

「よし。で、なんでオレがヘタリアの世界に行かなくちゃいけねーんだよ。」

『……怒らない？』

「話次第。」

『……』

やっぱ黙った。

（実は、志希がふたつ前のセリフを言うとき、なんかロシアの冬将軍的なオーラが出てた。）

『…実は、志希を死なせたのはほとんど俺のせいなんですっ！』

やっぱか。

『ぐわぁっ！！』

『スミマセンデシタ。』

オレは神をボコボコにした！！　神って弱い！！

まあ、それはおいといて。

オレは理由を聞いてみた。

「で、なんで死なせたんだ？」
『実は、今、死人が少しだけ少なくて、８人死なせなくちゃならなくなりまして……。』
微妙だな！！
「で？」
『ヘタリアってマンガは俺も知ってたんで、８人って枢軸＋連合の数だから、どうせならヘタリア好きの人をヘタリアの世界に行かせようと……ぐふぉあっ！！』

だいたい理由は分かったんで殴った。（横暴！）
「わかった。じゃあ行くなら早く行かせろ。」
『はーい。志希が最後だから、先に行った人たちと友達にでもなってください。』
「いわれなくてもなってやらぁ。」
『飛ばすのは原作が始まる直前の日本の家の前。連絡しといたから、すぐ入れると思う。お前は武術をやっているらしいから、大丈夫だろ。じゃあな。』

目の前が真っ白になって、再び白以外の色が入ってきたときにはマンガの中で見慣れた家があった。

ベタな事実と意外？な事実（後書き）

やっと行きました……！（感動）
多分、今までの自分なら、ずっと神の世界から離れませんね。
成長したなぁ…、僕。

同類（前書き）

今日気付きました！

感想が来てる！！？

しかもお気に入り登録1件！！？

びっくりです！　自分で「感想ください」と言ってるのに来てなかったので、ほんとに来るとは…！

それにお気に入り登録まで……。予想外です。

これからも感想などよろしくお願いします！！

今回短くしようかなあ…。

同類

……。

「ほんとに来たし。」

「あ、あなたですね？　川中志希さんというのは。」

とつぜん、近くの木の陰から男の声がした。オレと同じぐらいの年だと思う。

オレも声を返してみた。

「そうだが、お前誰だ？」

「僕は松井龍斗（りゅうと）です。ドイツさんのお手伝いをしています。」

「あ、お前もか。なんでオレの名前を知ってんだよ？」

龍斗は少しだけ笑った。

「命（ミコト）さんに教えていただきました。」

聞きなれない名前が出た。どっかの神みてえだ。…ん？　神？

「考えているとおりです。僕達をここまで飛ばした、あの神の人間名です。」

チッ、歴史上の気高い神の名前を使いやがって！　あとで少し…2、3発殴ってくる。（横暴！）

「そういえば、その命さんから荷物を預かってます。」

「へ？」

オレに荷物？　ここでの生活に必要なものか？

オレはカバンの中を開けてみた。

なんか普通だったっていうね！！

同類（後書き）

リクエスト募集します！
内容は、
「カバンを見た後誰と志希たちが出会うか」
「日本・ドイツ以外のメンバーのお手伝いのプロフィール」
です！

リクエストの場合、下のように書いてください。

〇〇のお手伝い（国名が入ります）
名前・　　（お手伝いの名前）
性別・　（女か男か）
年齢・？　（年齢不詳）
身長・　ｃｍ
体重・　ｋｇ（書かなくてもよし）
顔・
（特徴を書いてください）
性格・
・
（絶対に２つ以上書いてください）
武器・
一人称・『　　』（自分のことを何と呼ぶか、です）

よろしくお願いしまーす！

次、命&龍斗のプロフィールでも…。

予告通り命&龍斗（前書き）

今回は、前回の予告で言った命&龍斗のプロフィールです。

読まなくても、「あれ？　こんな設定だったの？　ふ～ん…。」ぐらいですので、飛ばしてもらってもかまいません！

「あー、うん、読みます。」て方はどうぞ。

予告通り命&龍斗

命（ミコト）

性別・男
年齢・？　（本人は「忘れた」らしい）
身長・１７４ｃｍ
体重・６２ｋｇ
顔・いいほうらしい。（容姿が思い浮かばないので、かっこいいと思う顔を想像してください。）
特徴・天然なのはラトビア並み。でも幸薄くない（神だから）。
　・志希には逆らえない。
　・志希以外には強気に出る。
武器・自分の特殊能力。『こいつ、使ったことねーんだよな。相手がいない。』
一人称・いつも『オレ』

松井龍斗（りゅうと）

性別・男
年齢・？
身長・１４８ｃｍ
体重・３７ｋｇ
顔・いたって普通。
特徴・ドイツのお手伝い。
　・ムキムキではない。
　・性格は日本似の優しい奴。
　・リトアニア並みに気がきく。

武器・柔道を習っていたのでそれ。あーあと怪力。
一人称・ふだんは『僕』　怒ると『俺』

予告通り命&龍斗（後書き）

こんなもんですかね？

リクエストきません…。

どうしよう、このままだと続けられない…。

次回からはあなたにかかっている！！

どうかよろしくお願いします！

2人目のお手伝い（前書き）

くそおっ…。
昨日投稿できなかった…。あの兄貴めぇ！！
気を取り直して…。

今回はイギリスが出てきます！　もちろんお手伝いも出てきます！
火野村祭さんのお手伝いを使わせていただきました。
ありがとうございます！
プロフィールは全員のお手伝いが出てからやります！（龍斗は例外）

2人目のお手伝い

カバン（旅行用の）に入っていたのは、

・着物（まあ日本の家だし、当然）
・ほか日用品（これも普通。でも俺が前世に使っていたものと一緒なのが気になる）
・いろいろマニュアル（なんだこれ）
・お手伝いのプロフィール（…もはや意味がわからん）

……以上。

「おや、アリアさんがいらっしゃいましたよ。」
「アリア？」
確かに、なんか物音が聞こえてくる。
見てみようと、すぐそばの、家の前の木によりかかった。
「…おっ、着いたぞ。」
！！？
この声は…イギリス！！
料理がまずい……クククッ。
「誰かいるのか？」
やべっ、ばれた。けどまあいいや。
「！！　誰だお前！？　なんで日本のうちに！？」
イギリスは驚きまくって、家の引き戸をたたこうとしてる。
「ちょっと待ってください。私は今日から日本さんのお手伝いになりました、川中志希と言います。決して不審者ではないので安心してください。」
イギリスはちょっと首をかしげ、後ろにいた奴に声をかけた。
「アリア、こいつ知ってるか？　日本のお手伝いだと言っているが

…。」
「ちょっと待っていてください。」
後ろにいたのは…外国人だ。イギリスと一緒にいるってことは、イギリス人か？
さっきの「アリア」とは、こいつのことだったらしい。
「…はい。知っています。日本さんのお手伝いで間違いありません。」
え？　オレはしらねーぞ、こいつのことなんて。
「そうか、じゃあ早く入るぞ。志希、お前もまだ入ってないんだろ？」
「？　どうして分かったんですか？」
「見りゃあわかる。」
イギリスは俺を引きずって、日本の家の中に入った。

2人目のお手伝い（後書き）

…なぜ最後、扉に鍵がかかっていなかったのか？
それは、騒ぎに気が付いた日本が開けておいたのです。

リクエストは、イギリス・フランス以外のお手伝いを募集中です！

あと、お気に入り登録をしてくださった方、知りたいので僕の方にメールください！！　これからしてくださる方も同じようにしてくださればうれしいです！

家の中（前書き）

前もって言っておきます。

日本の家の中は想像になってまーす！！

つくりがわからない。誰か教えてくれないかなぁ…。

家の中

「イギリスさん、いらっしゃい。志希ちゃん、ですよね？　命さんから聞いてます。今日からよろしくお願いします。」
「は、はい…、よろしくお願いします。」

わっ、日本がオレに向かってしゃべってる…。感動！！
…んっ？

「命のこと、なんで知ってるんですか？」

日本は（これから日本さんにしよう）、少し微笑んだ。

「命さんは私のお友達ですよ。何度か家にいらっしゃいました。」
「そうなんですか…。」

なんだよ、命ここまで来てんじゃん！　ちょっと知ってる程度じゃないぜ！！

「じゃあ志希、アリアとも仲良くしてくれよ！　いや、楽しみだな～。」
「そうですね～。」

…何が？　オレとアリアの仲が？　あんたらは親か！　転校してきてその学校の子と友達になれるか心配してる親だろ！？　絶対そうだろ！　うん！

「…僕の存在が忘れられてる気がするのですが…。（小声）」
「あ。わりー。オレも忘れてた。（小声）」

「酷いですね。（小声）」

（なぜ龍斗が突然出てきたか？　忘れていたのですよ、僕が。　ｂｙ　リュウ）（作者としてあるまじき行為ですね。　ｂｙ　龍斗）

「では志希ちゃん、部屋に行きましょう。荷物などを置かなくてはいけませんし。」

「あ、はい。」

そして、オレは部屋に通された。

家の中（後書き）

なんか中途半端なところで切れました…。

今回、ちょっと書き方を変えてみました。（前とちょっと内容も違います）

いやーっ、実に面白いです！　この小説を書くのが。時間はかかりますけどね。

よしッ、頑張るんだぜ！

お知らせ

申し訳ないのですが、この先どうやって進めればいいのか分からなくなったので、ネタが思いついた時まで更新はできません…。

僕が何も考えずに始めてしまったせいです。すいません。

僕一人ではやっぱり無理でした。
お気に入り登録をしてくださっている方、していなくても読んでくださっている方々、
繰り返しますが、申し訳ありません！！

あ、でもリクエストは募集中ですので！！
今は皆様のリクエストが頼りです！！
よろしくお願いします！！

久しぶりだぁ！！（本編とは何の関係もございません）　（前書き）

おっしゃ、そろそろ更新しないと僕がなんかやばい？　感じです。
あー、ネタないけど、もう！！

どうにでもなれぇ！！

（しばらくやってなかったので、忘れた人は前回までを読んでくださいね。）

久しぶりだぁ！！（本編とは何の関係もございません）

「ここは私が普段生活している場所です。まず、私のペットのポチ君を紹介しますね。おいで、ポチ君。」

日本さんが呼ぶと、ポチ君はすぐさま走ってきた（こういうときは飛んできたって言うだろうけど、あいにくポチ君はそんな体型じゃない）。

「ポチ君、この子は今日から私のお手伝いさんの、川中志希ちゃんです。」

「はじめまして、ポチ君。よろしくお願いしますね。」

ウォーっ、ポチ君までいるのか…。いや、あたりまえだよな。日本さんとポチ君は家ではセットなんだぜー！！

「ポチ君、そこで待っていてください。」

オレがポチ君と遊び終わったのを見て、すぐさま日本さんが声をかけてきた。

（さっすが日本さん、空気を呼んでいる…。）

「志希ちゃん、もうすぐ夜です。夕飯は何にしましょうかね。」

「あ……。」

そーか、もう夜か…。早くね？

「私は、日本さんのつくったものなら何でもいいですよ！　日本さんの料理、早く食べてみたいです。」
「ありがとうございます。じゃあ、今日は志希ちゃんが来たということで、大げさですがお赤飯にしましょうかね。志希ちゃんも手伝ってください。」
「分かりました！」
「じゃあ、俺らはそろそろ帰るな。行くぞ、アリア。」
「はい。」
「じゃあ僕も帰りますね。」
「「さようなら、また明日。」」

おっ、日本さんとハモった。
赤飯か…。作ったことねーけど大丈夫だよな？　でも、日本さんの家って竈（かまど）なんだよな…。やったことねー。

ま、だいじょうぶだろ、な。（あーでも心配…。）

久しぶりだぁ！！（本編とは何の関係もございません）　（後書き）

ふーっ。
久しぶりの更新は疲れますぜ。
っていうか今回、ネタなくてもできんじゃん…。（…すみませんでした。）
はーい突然ですが―、
リクエスト大募集中なんだぜー！！
イギリスとフランスとアメリカと中国以外でお願いします。
（ということは、イタリアとロシアだけってことですね。→無駄に長い。）

初料理（前書き）

赤飯のつくり方が全く分からないので、そこはとばします。

初料理

「ふーっ、出来ましたね。」
「はい！　美味しそうですね！」
作者の手によってつくっている時のことは書いてないが、仲良く作ってたってことで。
「じゃあ机に出してください。」
「はーい。」
日本さんと赤飯やそのほかの焼き魚などをだす。
「「いただきまーす。」」
モグモグモグモグモグモグ……
「あー、美味しいです…。」
「そうですか？　じゃあ志希ちゃんのおかげですかね。」
「えっ、いやそんなことはっ、」
「謙遜しなくてもいいですよ。志希ちゃんがちゃんと私のいった通りにやってくれたからおいしくできたんです。今まで作ったことないとは思えません。」
ほんとは竈も使ったことなかったんだが。まいいや。
「「ごちそうさまでした。」」
でも美味かったなー。これからこんな食事が毎日食えるんだ！　よ

っしゃー。

「？　どうしましたか？」
「いっいえ！　なんでもないです。」
「そうですか。」

「じゃあもう寝ましょうか。志希ちゃんは、私の隣です。布団をひくので、手伝ってください。」
「はーい。」

バタバタバタバタ…ドタッ

「志希ちゃん、大丈夫ですか！？」
「は、はい。すみません、大丈夫です。」
「そうですか。あ、それは南の、あちらの方にお願いします。」
「はい。」

「では寝ましょうか。」

「「おやすみなさい。」」

次の朝が楽しみだー。あ、明日何時に起きるか聞いてなかった…。

初料理（後書き）

志希ちゃん竈で初料理の巻ー。

あ、学校に遅刻するっ！！

ってことで次回！

命を励ます？　志希（前書き）

疲れたー。明日友達の家に行きます！
→まったく関係ありません。すみません。

命を励ます？　志希

――――――――――――――――――――――――――――、

『おーい志希―、志希―っての。』
「うるせえ、ドカス。」
『あれ、それ違うマンガ…。』
「オレが好きなマンガの一つだ、無駄な興味を持つな。題名がそのまんまで読んでつまんなくなったのもお前のせいだ、命。」
『そこオレ関係ないよな！？　作者がやったんだろ！？』

→なんかやってみたかった。　ｂｙ　リュウ（作者）

「で、なんだよ命、オレの眠りを妨げてまで出てくる意味は？」
『いや…最近オレ出てないなあと…。』
「んな理由で出てくんな。」

ボカッ

『～～～～～～～～～～！！』
「へっ、どうでもいい理由でこの小説に出てくるお前が悪い。」
『いや、オレも一応主要人物…。』
「作者な、絶対お前のことどうでもいいって思ってるぞ。今まで全く出てこなかったのが証拠だ。」
『え…、ほんと…？』

ウソです。…たぶん。　ｂｙ　リュウ

『作者さん、ちゃんとしてください。』

「作者に言ったってあんま効果はない。お前が行動しなきゃな。」

『…おう。』

命を励ます？　志希（後書き）

時間がないんでここで。
仲の志希が好きなマンガは、僕が好きなマンガです。（分かる人いるかな？）
セリフはその中の敵役から。

枢軸、日本の家に集合！（前書き）

今回は、イタリアのお手伝いが出てきます。（だって枢軸だもん！）
いちばん最後に来たのにね。
もう全員のお手伝いがこっちでそろったので、お手伝いのリクエストは締め切らせていただきます！
今後の展開のリクエストもよろしくお願いします！

枢軸、日本の家に集合！

「ふぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜…、ッ、苦しい…。」
「え、大丈夫ですか志希ちゃん！」

あっ、やべエ心配された。

「だ、大丈夫です。いつも朝起きて第一声は最後伸ばすようにしてるんです。」

これは本当だ。

「…なんでですか？」
「武術をやっていたんで、呼吸が長いと何かと便利でして。」
「そうなんですか…。」

あ〜あ、命のせいでまだ寝不足だぜ…。

『なんか呼んだか志希？』
（へ！？　なぜに命の声が頭に響いてくる！？）
『テレパシーだ。オレが死なせた志希たち8人とはなんか、どーにかやって頭ん中でしゃべれるようにした。』
（説明がアバウトだな。）
『あ〜、そこはスルーで。オレもよくわかんねーんだ。それより志希、日本が呼んでるぜ？』
（あーほんとだ。じゃ、命、そろそろこっち来い。お前をなぐりたくてしょうがない。）
『殴られるのはいやだ！　でもまあ、行くわ。』

（じゃーな。）

「どうしたんですか？　急に止まって…。」
「いえ、なんでもないです。それより日本さん、早く布団片付けて朝ご飯作りましょう！　私、おなかすきました。」

早く飯を食べるため！　それに命来るらしいから、準備万端にしとかねーとな。
（その頃命は神の世界で、ロシアが不気味に微笑んだ時のような感じがしたという。）

「ふふっ、そうですね。早く片付けてしまいましょう。」

バタバタバタ。

「ふーっ、これで完璧！　着替えてきます。」
「分かりました。」

オレは別室に。途中でベルが鳴った気がするが、命が来たのか？

「ああ、イタリア君にドイツさん。どうしたんですか？」
「こいつが日本の家に行きたいと言ったからな。暴れられるのも困るから連れてきた。」
「日本の家にもお手伝いが来たんでしょ～？　それもかわいい女の子！　見てみたくてさ～。」
「そうですか。では上がってください。呼んできますので。」

ふう、着物はこれでいいんだよな…。最近着てなかったから焦ったぜ…。

「志希ちゃん、イタリア君たちが来たので、来てください。」

イタリア？　そういやまだ会ってなかったな。

「はーい、今行きます！」

バタバタ…

「はい、日本さん、なんでしょうか？」

「わ～っ、かわいいね、君！　名前は？」

うっ、ナンパ来た。いやなんだよな～。イタリア自身は好きだが。

「川中志希です。はじめまして。」

「やっぱり日本の家の子だね～。黒い髪すごい綺麗～！　今度一緒にお茶しない？」

「…善処させていただきます、イタリアさん。それより、イタリアさんのお手伝いは誰ですか？」

「ああ、雛のこと？　おいで～、雛（ひな）。」

「はい～。」

そこにいたのは。

あれ、女の子？　イタリアにナンパされまくって家に住んでるの？

「雛ちゃん……というんですか。はじめまして。」

「ごめんね～、ボク、男なんだよ～。」

え。

（えーなになに、ポーランド的な？　女装趣味の男子ってあんまいないぜ！　レアじゃん！）

「志希ちゃん…どうしたんですか？」

「あっ、いえ、なんでもありません。」

志希は内心、すっごいびっくりしていた。

枢軸、日本の家に集合！（後書き）

少ししか離出せなかった…。申し訳ない。
次回からお手伝い出しまくるよ！

連合（ロシア除く）、日本の家に集合！（前書き）

更新が遅くなりすいません。
今回は連合が…来る…かなぁ…？　書いている僕でも分かりません。

連合（ロシア除く）、日本の家に集合！

さて、イタリアさんとドイツさんが来て、命も来て、さあご飯作りますよってところに問題児5人組が来た。
分かるよな？　正解は、

「連合の皆さん！」でした。ちなみにこれは日本さんが言ったんだぜ。ここからは日本さんと連合との会話。

「なぜここに？」
「ＨＡＨＡＨＡ！　来たくなったからだよ！」
（むちゃくちゃな理由…。）「私たちは今から朝ご飯なんですが…。」
「じゃ、じゃあ俺も手伝う「善処させていただきます。」…そうか。」
「では失礼します「ちょっと待つあるっ！」…なんですか？」
「我が手伝うある！　英国よりは使えるあるよ！」
「……そうですね、ではよろしくお願いします。どうせなら、皆さんも朝ご飯一緒にどうですか？」
「そうだな！　ちょうどおなかすいてたんだよ！」
「じゃあ、あがらせてもらうよ～。」
「どうぞ。」

この小説始まっていちばん長い会話文だな。
ちなみに、誰が何いってるかわかるか？　念のため、下に書いとく。
（「さん」とかはナシ）
日本→アメリカ→日本→イギリス（日本）→日本（中国）→中国→日本→アメリカ→フランス→日本
これでいいよな。うん。

「じゃあ志希ちゃん、私、志希ちゃん、命さん、イタリア君、雛君、ドイツさん、龍斗君、アメリカさん、イギリスさん、フランスさん、中国さん「にーにと呼ぶある！」…あなたたちがお手伝いの方たちですね？」

あ、今日本さん、中国さんのこと無視した。

「はい。イギリスさんのお手伝いの如月アリアです。」
「アメリカさんのお手伝いの、本郷豪次郎です。」
「違いますよ、本名はグレッグでしょう？　フランスさんのお手伝いの、アングーモア・アルザスです。」
「えっとぉ、ししょーのお手伝いの、楊玲羅ですねぇ。」

「「「「よろしくお願いします。」」」」

おーっ、声そろった。練習してたのか？

「はい、よろしくお願いします。この子は、私のお手伝いの志希ちゃんです。」
「川中志希です。よろしくなのです！」

アレ、はっちゃけちゃったよ？　オレそこまでテンション高くないよな？　アレ？

「ではご飯にしましょう。志希ちゃん、……兄上、よろしくお願いしますね。」

「わかりました。」

「わかったある！　任せるよろし！　でもにーにと呼ぶある…。」

中国さんはなんかテンション低いな、正反対なんだぜ。

連合（ロシア除く）、日本の家に集合！（後書き）

枢軸＋連合のお手伝い大集合！

陸点さんすみません。グレッグの語尾の設定だけ無しにさせていただきます…。分からない…。

九条さん、出来るだけ玲羅の口調、やってみました！　けど、なんかよくわからないので、感想などでいってやってください。（自己紹介変じゃね？）

終わった終わったー。

お手伝いのプロフィール集（前書き）

せっかくなのでプロフィール集。
志希や龍斗も入れちゃいます。
ちなみにリクエストで届いたもの、そのままです。たまに例外あり。
あ、ロシアはまだ出てきてませんが入ってます。

お手伝いのプロフィール集

日本のお手伝い
名・川中志希（しき）
性別・女
年齢・…？
身長・１５４ｃｍ
体重・さ「書かせるかオラァっ！！」
顔・日本の髪を伸ばしただけです（肩に触れる程度）
性格・上と認めた者にはとことんついて行く、犬みたいな感じ。
・でもほかにたいしては横暴。
・口調が男のようだが日本の前では猫かぶり。敬語。
武器・日本と同じく刀。たまに銃。
一人称・日本の前では『私』　いないところでは『オレ』

ドイツのお手伝い
名・松井龍斗
性別・男
年齢・？
身長・１４８ｃｍ
体重・３７ｋｇ
顔・いたって普通。
特徴・ドイツのお手伝い。
・ムキムキではない。
・性格は日本似の優しい奴。
・リトアニア並みに気がきく。
武器・柔道を習っていたのでそれ。あーあと怪力。
一人称・ふだんは『僕』　怒ると『俺』

イタリアのお手伝い
名・千寿院（せんじゅいん）　雛（ひな）
性別・男　↑ここ重要
年齢・見た目１６歳くらい
身長・１６８ｃｍ
体重・「駄目だよぉ、人にそんなこと聞いたらぁ。」
武器・その場にあったものを武器にする（食器とか筆記用具とか）。ものがない場合は空手
一人称・『ボク』。怒ったときは『俺』。

・女装趣味があり基本女の子な格好。ぶっちゃけ可愛い。
・だが、男としての自覚はある＝オカマとは違うので、オカマ呼ばわりされると激怒する。
・少しウェーブした茶色の長髪。前髪にはオシャレとしてピンをしていることが多い。
・目は垂れ目で、瞳は少し薄い茶色。
・いつもにこにこしているが、嫌いな人には笑顔を絶対向けない。でも基本みんなが大好きなので笑顔じゃない顔はあまり見られない。
・軽い性格に見られがちなのだが、しっかり者で、周りをちゃんとまとめるタイプ。
・自分の意見はとにかくしっかりはっきり言う。
・喋るときは、最後の音が少し伸びる。
・怒るときは大抵ものに当たる。そして男口調。
・買い物するときと食事してるときが１番幸せ。甘いもの大好き。

アメリカのお手伝い
名・本郷グレッグ
性別・男
年齢・１７歳
身長・１９０センチ強　かなりでかい

体重：７５キロだが……なぜ訊く？
顔・老け顔のコワモテ。髪は茶色がかった黒で短い。

アメリカ人とのハーフだけど本人はコンプレックス気味で、立派な日本男児になりたいと思っている。本名はグレッグなのに「豪次郎」と名乗ってしまうお茶目さん。
日本を始めて見たときにショックを受けたが今は普通に尊敬している。
堅苦しい性格なのでアメリカの突飛な行動についていけない。普段はさん付けするが、キレたときは「アメ公」などと乱暴な呼び方に。
真面目で不器用。女性には気を遣うけど気づいてもらえない。割といい人なのだが顔が怖いせいで酷い目に合っている。
特技は剣道。趣味は百人一首。
こんなプロフィールだけど高校生。

イギリスのお手伝い
名・如月（きさらぎ）　アリア
性別・女
年齢・？　（見た目は中学１年生くらい。だが酒は飲む）
身長・１４７ｃｍ
体重・「レディに年齢と体重は聞いてはいけないのよ？（黒笑）」
顔・薄緑色の瞳、ツリ目。髪は茶色のような金髪のロングヘアで、基本ポニーテール。（母がイギリス人とアメリカ人のハーフ、父が日本人。）

性格・気が強そうな見た目に反しておっとりしている。でも何事にも積極的。
・通常時の口調は女らしい＋おとなしい、な感じ。友達（仲のいい人）にだけタメ口。
・怒ったりするとものすごいスラングが次々出る。（母譲り）

・酔った時は暴れる、服を脱ぐ、キス魔になる、などかなり酷いことになる。
・喧嘩に強い。
・誰にでも優しく、サポート役をやらせたらピカイチ。お茶出すタイミングとか超絶妙。
武器・投げナイフや剣等の刃物系暗器。
一人称・『私』。あたしとは絶対言わない。

フランスのお手伝い
名・アングーモワ・アルザス
性別・男
年齢・外見高３
身長・１７８ｃｍ
体重・ふふふ…野暮ですよ？
　顔・美形。フランスと違うワイルドさがある。
性格・傲慢。あと自己中。女性や綺麗なものには優しい。
武器・縄。
一人称・『俺』

中国のお手伝い
名・楊（ヤン）　玲羅（レイラ）
性別・女
年齢・１３歳
身長・１４８ｃｍ（自己申告）
体重・はぁぁ！？女の子に何聞いてんじゃボケぇ
性格・基本的にはおっとりした女の子。語尾に「～ですねぇ」「えっとぉ～」が口癖。
一応中国人だが、中国語よめなーい、かけなーいな人。国籍も日本人。の割に人に対して「これ」など不思議。
中国のことを「ししょー」とよび、太極拳をやっている。

怒るとなぜか大阪弁になる。
一人称は「わたし」。怒ると「うち」になる。
髪型はおだんご。

ロシアのお手伝い
名・富澤（とみざわ）　日向（ひなた）
性別・男
年齢・１７歳くらい
身長・１７０ｃｍ
体重・４８ｋｇ
武器・銃（大抵２丁）
一人称・『俺』。もとは『僕』だったが、男らしく、と思い変えた。

・髪はプラチナブロンドのセミロング。
・瞳は濃い紫色。
・とにかく美人。男なのに。
・顔ちっちゃいわ睫毛ながいわ髪サラサラだわで、そのへんの女子になら絶対負けない。
・そんな容姿のため女子に間違われるのが嫌で、伊達眼鏡をしているがあまり効果はないご様子。
・クールに見えるが、恥ずかしがりやで無口なだけ。
・話すときは一言ずつぐらいしか話さない。
・仕事はカンペキにこなすタイプで、そういうときだけは恥をかなぐりすててる。
・昔ストーカー被害にあったことがあり、それをきっかけに護身術を心得ている。
・背後をとられるとどんな相手だろうと一本背負いしちゃう癖がある。
・呪いが何故か効かない。
・この子が怒ったときは絶対零度の笑みですべてが凍る。

・体重が少ないのが悩み。
・実は昔は孤児で、小さいとき養子にとられた。なので本当の親についてはまったくわからない。

お手伝いのプロフィール集（後書き）

アレ、なんか自分が作ったのより他の皆さんがつくってくれたお手伝いの方が特徴とかすごいよ？　長いよ？　なんか僕は小さい！んだぜ！

番外・お手伝いの対談（前書き）

ロシアのお手伝い、日向初登場！

番外・お手伝いの対談

今日は、いきなりなのにお手伝いが1日フリーの日。
なので、日本さんに大きい1部屋貸してもらってお手伝いが全員集まった。

「今日は、なんか日本さんたちがフリーにしてくれたので、みんなに集まってもらった！　テーマは、『自分たちの生前のことについて』と、『どうやって主人と出会ったか』だ！　はい、まずオレからな。」

オレは全員をぐるりと見回してから話し始めた。

「オレは生前、本、主にマンガが好きで、ずーーーっと空いた時間にはマンガ読んでた。あ、オレはまだ11だから学校に通ってるんだが、そこで友達が持ってきたヘタリアのCD聞いたりだな。毎日変わらない。で、なぜ会ったのか。もちろん、オレが死んだから。家の前に放り出されて、イギリスさんが通りかかって入れてもらった。龍斗もいたな。次龍斗。」

龍斗はコクっ、と頷いた。

「僕は日本人ですが、父親の仕事でドイツへ住んでいました。だから命さんもドイツさんのお手伝いにしたんだと思います。ドイツの学校では成績は普通、でも世界史だけは、ヘタリアのおかげでけっこうよかったです。ドイツさんと会ったのは、僕がドイツさんの家へ訪ねたからです。命さんのおかげで、スムーズに入れました。では、次は順番的に雛君ですね。」

「は～い。ボクは、龍斗君と一緒で、仕事の都合でイタリアにいたんだぁ～。結構楽しかったよぉ。パスタもピッツァも美味しいし～。日本でヘタリアっていうマンガを偶然読んで、すっごいおもしろかったからイタリアにも持って行ったんだぁ～。主人公のイタリアさんはボクにそっくりだったし～。で、イタリアさんと出会ったのは、ナンパなんだよねぇ～。女の子に見えたらしくて。次、グレッグ君。」

「…俺はハーフだが、親の勧めでアメリカに住んでいた。日本語を勉強して、話せるようになった。アメリカさんは俺が家に行った。イギリスさんに少し助けてもらったが。次、アリアだ。」

「わかってるわ。グレッグ短いわね。私は母がイギリス人とアメリカ人のハーフ、父が日本人。幼少の頃日本で暮らして、8歳ごろイギリスに住み始めたの。父は名残惜しかったみたいだから日本に残って、年に4回こっちに来たわ。楽しかったわよ。ヘタリア持ってきてくれたし。イギリスさんと出会ったのは、龍斗と同じく家を訪ねたから。次アングーモア。長い名前ね、もっと日本っぽくしなさい、言いやすいから。」

「はいはい、考えておくよ。俺はフランス人。日本語は、ヘタリアを読んでから勉強し始めた。日本語の方がわかりやすそうだったからね。フランスさんとは、命さんに紹介してもらったんだよ。次、玲羅。」

「えっとぉ、わたしは中国人です～。だけど3歳のころに日本に来たから中国語読めません～。親はわたしが3歳のころに死んじゃって、親戚の家に預けられましたぁ。ししょーと会ったのは、命さんが案内してくれたんですよぉ。中国じゃ、わたしもわからないのでぇ。次、日向君でしょう～？」

「う、うん。俺は、日本人だけど、なぜかロシアさんみたいな感じ、です。何代か前に、ロシア人の、人がいた、かもしれない。孤児だったから、親に関しては、何もわからない。ロシアさんは、最初に呪われそうになったけど、なぜか俺には、効かなかった。ウクライナさんが、連れてきてくれた。」

全員終わった。なんか長い人と短い人がいるぜ。
っていうか。

「日向って孤児だったのか？」
「う、うん。」
「よかったな。」
「ありがとう。」

番外・お手伝いの対談（後書き）

今回の失敗点

・玲羅がぶりっ子になった。

・日向がただの引っ込み思案で口下手な子になってしまった。

番外続いちゃうねえ。日本さんの誕生日。（前書き）

日本さん、誕生日おめでとう！
何歳なんだろうね。

前々回、夕食を食べる前に終わりましたが夕食も食べて寝たので。
あ、ロシアさん登場。

番外続いちゃうねえ。日本さんの誕生日。

「日本さん日本さん！」
「なんですか？」
「日本さん、誕生日おめでとうございます！」
がらっ
「日本！　Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｂｉｒｔｈｄａｙ！　なんだぞ！」
「Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ　ｏｎ　ｔｈｅ　ｂｉｒｔｈｄａｙ、日本。」
「日本、Ｂｏｎ　Ａｎｎｉｖｅｒｓａｉｒｅ！　お兄さんも来ちゃったよ～。」
「生日快？！　日本！」
「うふふ、日本君、Ｃ　Днем　Рождения」
「日本～！　Ｂｕｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅａｎｎｏ！」
「Ａｌｌｅｓ　Ｇｕｔｅ　ｚｕｍ　Ｇｅｂｕｒｔｓｔａｇだ、日本。」
「みなさん…。」
「みなさん、日本さんの誕生日に集まってくれたんですよ。それに、あと３人来る予定です。」
「志希ちゃん…。ありがとうございます。」
「！　お、お礼なら来てくださった皆さんに行ってください！　私はほとんど何もやっていませんから。」
「でも、」
「いいんですよ！　あっ、ほかの人たちが来たみたいです。」

「日本、Ｂｕｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅａｎｎｏ」
「Ｆｅｌｉｚ　Ｃｕｍｐｌｅａ？ｏｓやで、日本！」
「日本、？？　？？なんだぜ！」

「ではみなさん、せーの！」

「「「「「「「「「「「誕生日おめでとう！」」」」」」」」」」」

ちなみに、今の音頭をとったのはオレだぜ。
日本さん、何歳かな？　ちょっとなんか怖いから聞かないけど。

「おーい、オレを忘れんなよー。」

あ、命じゃん。

「命さん！　来てくださったんですか？」
「そりゃあ友の誕生日には来るって！」
「ありがとうございます。」

「では、今日は盛り上がりましょーっ！」

『おーーっ！！！』

今日は主にフランスが酔っぱらったりイギリスが酔っぱらったりしてアメリカと日本さんが大変そうだった。命は勝手に帰りやがったんで夜中に呼び出して殴っといた。

番外続いちゃうねえ。日本さんの誕生日。（後書き）

アメリカとかがいってるのは世界の「誕生日おめでとう！」です。ドイツは心配だ。間違ってるような気がする。

明日はスペイン！やるかも。やるときはもちろんロマーノとか日本出すよ！

「作者も大変だな。明日もやらなくちゃいけないんだと。」
「そうだよな、今日だって親に見つからないようにやってたのにな。」
「う、うるさいな、志希と命。あ、ちなみに今回、ほかのお手伝いは各国の家にいます。お手伝いは対談と同じくフリーなので買い物とか修行とかやってます。」

番外…、スペインの誕生日。（前書き）

番外が3つ続くってどうよ？　とか自分で思ってるリュウです。
スペインの誕生日、間に合わなくてすいませんでしたぁ！！
中身は、だいたい日本さんのときと一緒だと思います。
でも最初の方はスペイン視点で急に志希視点になります。
『俺』から『オレ』になったら志希です。

番外…、スペインの誕生日。

「ス、スペイン、これやる。」

とつぜんロマーノからなんか手で抱えられるほどの箱を貰った。

「……へ？」

全く理由がわからんかった。

「なあロマーノ、これ何なん！？　これ何なん！？　この前日本の誕生日やったけど、そん時のプレゼントか！？　俺から渡してほしいんか！？　ダメやでロマ、ちゃんと本人から渡さんと…」

「渡したじゃねーかっ…。コノヤロー！！」

叫んで出ていってしもた。

ぽかーん

「なんか俺、悪いことでもしたんか…？」

とにかく、日本の家に届けんと。

長旅

ピーンポーン

「はーい…ってスペインさん！？」

「よう日本、突然でごめんなー、あがらせてもらってええ？」

「あ、はい…。」

さて、スペインさんの話を聞こうか。

「実はなあ、さっき、ロマーノが、俺にこれ渡してどっかいってしもて…、どうせ日本に渡す奴やろから、届けにきたんやけど…。」

あ、なるほど。
日本さんも気がついたみたいだ。

「ふふっ、その箱はスペインさんが貰っておいてください。せっかくロマーノ君が勇気をだして渡したのですから。」

「へ？　これ、日本のやろ？」

「ちがいますよ。ロマーノ君の分はちゃんと昨日いただきました。」

「じゃ、じゃあ誰の…？」

「今日は、何の日ですか？」

「何の日……って、あ！！」

やっと思い出したか、無理もないけどな。スペインさんの家貧乏だし、誕生日なんて気を使わないよな。

「そか、ロマーノ、ちゃんと俺の誕生日覚えててくれたんやな。」

「当たり前ですよ。」

「ほんまありがとな日本、俺、ロマーノ探してくるわ。ちゃんと礼を言わんとな。」

「探す必要はありませんよ、スペインさん。ロマーノ君はここにいますからね。」

「ほんま！！？」

「ええ。こちらへ。」

そして日本さんが、家の中で一番広い部屋へいった。

ぜってースペインさん、びっくりするぜ。

ガラッ

パーン！！

「「「「「「「スペイン、誕生日おめでとう！！！」」」」」」」

「みんな…。」

よしよし…。

「ありがとなあ、俺のために…。」

なんか「べ、別にお前のためじゃないんだからな！」って聞こえたけど空耳だろう。絶対そうだ。

それからはどんちゃん騒ぎ。

あ、いたのはいつもの枢軸＋連合、ロマーノ、プロイセンです。プロイセンはなんか悪友つながりで。

どんちゃんどんちゃんどんどんちゃん。

全員が帰ったのはもう外が暗くなったころ。

中国さん以外ヨーロッパなんだから大変だねえ。

「じゃー、ありがと日本！　ほら、いくでロマーノ。」
「わかってる。じゃーな日本。」
～連合＋プロイセンはうるさくなるので省略～
「日本～、俺の誕生日も日本の家で祝ってね～。」
「こ、こらイタリア！　こいつのいうことは聞かなくていい。じゃあな、日本。」
「はい、ではまた。」

みんな自分の家の方向に散っていく。

「行っちゃいましたね…。」
「そうですね…、また明日も頑張りますよ。えーっと、次の誕生日はたしか、バルト三国のリトアニアさんでしたね。ちゃんとお祝いしなくては…。」
「リトアニアさん？　ですか？（ほんとは知ってるんだがな。）」
「あ、志希ちゃんはまだ会ったことありませんでしたね。誕生日のときには会いますから、楽しみにしていてください。」
「はいっ！」

番外…、スペインの誕生日。（後書き）

スペインの関西弁大丈夫かな…？
まあ、遅くなったけど、

スペイン　　誕生日おめでとう！！

リトアニアの誕生日だ！！（前書き）

番外とかつけんのめんどくなったんでつけない。
リトアニアと志希がご対面。なんだぜ！

リトアニアの誕生日だ！！

今日はリトアニアの誕生日。

リトアニアの家の道筋を、ポーランドが歩いています。

「今日リト誕生日だから、日本の家に呼ばなくちゃいけんし。」

リトアニアの家に入ると、リトアニア本人が、誕生日だというのに忙しく動き回っています。

「あれっ、ポー来てたの。」

「リト、何やってるん？」

「日本さんに、プレゼント送ってなくって。作っておいたんだけど、どっかに行っちゃったんだよー。」

いい偶然です。ちょうど今から日本の家へ行くのですから。

でも、リトアニアは自分の誕生日を忘れているようです。

「あっ、あった。ポー、俺今から日本さんの家へいってくるから。ちょっと留守番よろしくね。」

「俺も行くしー。ちょうど日本の家に行くんよ。」

「そう？　じゃあいっしょに行こうか。」

仲がいい2人です。
このまま日本の家に向かっていきます。

ピーンポーン
「日本ー？　来たしー。」
「あっ、ちょっと待ってください。」
おっ、この声はポーランドだ。
ほんとに名古屋の女子高生。男なのに。
ガラッ
「ようこそいらっしゃいました。」
「！？」
ササッ
あー、隠れちまった。
まあいいや。これから慣れてもらおう。
「あのー、すいません。どなたですか…？」

「はじめまして。私は日本さんのお手伝いの、川中志希と申します。どうぞ、お上がりください。」

「はあ…。」

「あっ、志希ちゃん。リトアニアさん、ポーランドさん、ようこそ。ポーランドさんはこちらへ。リトアニアさんは、志希ちゃんとここで少し待っていてください。」

「はい、わかりました…。でも、俺はこれを持ってきただけなんですけど。」

「なんですか？」

「日本さん、この前は誕生日おめでとうございます。俺は仕事で来れなかったので、これを。」

そして、リトアニアさんは日本さんに、小さめの箱を渡した。

箱の中には、

「俺の家のツェペリナイです。誕生日には合わない気もするんですけど…。」

「いえ、ありがとうございます！　とても美味しそうですよ。」

「よかった…。じゃあ、俺はこれで。」

「あっ、だめです。まだ帰らないでください。大事な用があるので。」

「えっ？」

「では、待っていてください。すぐ戻ってきますので。志希ちゃん、よろしくね。」

「はい。」

日本さんは前、スペインさんの誕生日にも使った一番大きい部屋へ入った。

ガヤガヤガヤガヤ

「リトアニアさん、志希ちゃん、入ってきてください。」

「はーい。」

パーンパーンパーン

「「「「「リトアニア（さん）、誕生日おめでとう！！」」」」」

「え…？　誕生日？」

「そうですよ。今日はあなたの誕生日です。」

リトアニアさんはすごいおどろいてる。

「あっ、誕生日か…。日本さんの方に気を取られて、自分のことを忘れてました。みなさん、ありがとうございます。」

「今日はあんまり人数を集められませんでした。」

「いえ、そんなことないです。ポーもラトビアもエストニアも日本さんも志希ちゃん？　も、みんなありがとう！　こんな風に祝われたのって、すごい久しぶりです。絶対に忘れません。」

なんか大げさなようだが、うれしく思ってもらえたのならこっちもうれしい。

そのあとは、みんなで遊んで帰った。

（ポーランドさんは終わりのころに寝てしまい、リトアニアさんがおぶって帰った。）

リトアニアさんがくれたツェペリナイは。

「ちょうど2つ入っていたのでよかったです。おいしいですね～。」

「はい！」

日本さんとオレでおいしく頂きました。

リトアニアの誕生日だ！！（後書き）

ポーランドってムズカシイ。
口調と一人称が微妙だ。
それに、日本←→ポーランド、リトアニアの呼び方ってどうだっけ？

「日本さん、次に誕生日の人は誰ですか？」

「エストニアさんですよ。今日来ていたでしょう？　２４日なので
かなり後ですよ。」

初・世界会議！（前書き）

やっと誕生日がひと段落。まあもうすぐエストニアが来るんですけど。
こんなに続けてきて初の世界会議。終わりが見えない。
これリクエストだったりする。書いてたら普通は世界会議書くのに、僕は忘れていたよ。

初・世界会議！

朝、日本さんが言った。

「志希ちゃん、今日は世界会議に行きますよ。」

お。

よっっっしゃああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！

…サーセン大げさ。

「はーい。」

ポチ君は家の隣の人に任せて、会場に出かけた。

「つきました。感想・でかい。」
「…志希ちゃん、誰に言ってるんですか？」
「いえ、でっかい独り言ですよ。」
（…中国さんみたいですね。）

日本さんがそう思っているのもスルーしてー。（ああ！　マンガ読んでたから知ってたさ！）
会議室へ入ると、イギリスさんがいる。

「よう日本。」
「おはようございます、イギリスさん。」

日本さんとオレが席へ着いている間に、アメリカさんとかの連合やスペインさんとかスウェーデンさんとか、各国が集まった。
オレらお手伝いはご主人の後ろへ立っている。

「じゃあ、これから世界会議を始めるぞ！」

アメリカさんの一声でがやがやしていた部屋が静かになる……

……と思いきや（いや誰も思ってないけど）、もっとうるさくなった。がやがやどころじゃないぜ！

マンガ通り、イギリスさんとフランスさんがケンカし始めて、がやがや。
ドイツさんが叫んで、しーーーーーーん。
イタリアさんが「パスターーーッ！！」で、……？　な感じ。

解散。（えええええーーーっ！！？）

帰ってきてポチ君帰ってきて、日本さんの感想。

「空気読んでよかったです…。」

初・世界会議！（後書き）

そういえば久しぶりの更新だった。

エストニアの誕生日！（前書き）

はい。エストニアの誕生日を今日の朝まで忘れていたリュウでございます。
でも、どうしよう。
日本とスペインとリトアニアの誕生日やったせいで、どういうシチュエーションにしようか決まってない（現在、話全く書いてません）。
頭の中にも何もないしー。でもそれがいつものことなのが悲しい…。
２５日になっちゃいましたが話の中では２４日ってことになってます。1

エストニアの誕生日！

２月２４日、今日はエストニアさんの誕生日だ！
日本さんの家に来てもらうように言ったけど…来るかな？
まあ、リトアニアさんが、ロシアさんにバルト３国全員を今日だけフリーにしてもらうようにいったから大丈夫だろう……多分。

「志希ちゃん、次は料理ですよ！」
「はいっ！」

オレは忙しいのでまたあとで！

こんにちは、僕はエストニアです。
今日もロシアさんの圧力におびえる毎日…、ひっ、いえロシアさん、なんでもないです。

ほっ、行ってくれた…。
え、何か変わったことですか？
そうですね…、そういえば、ついさっき、リトアニアがふるえながらロシアさんに何か頼んでましたよ。そして、ロシアさんが笑顔で頷いて、そして、リトアニアの耳元で何か囁いてて、またリトアニアが震えだしました。多分、何かを条件に出されたんでしょう。リトアニアの胃痛が心配です。
…あれ、リトアニア。今、君のことを話してたんですよ。

今から日本さんの家へ？　僕はいいですけど、ロシアさんが…。
え、いいって！！？　あのロシアさんが！？
わかりました。じゃあ早く行こう。ラトビア、早く！

ピーンポーン

「すいませーん、日本さんか志希ちゃんいますかー？」
「少々お待ちください。今行きます。」

がらっ

「エストニアさん、ラトビアさん、リトアニアさん、ようこそいらっしゃいました。エストニアさん、ラトビアさん、はじめまして。私、日本さんのお手伝いの川中志希と申します。さあ、お上がりください。」
「はい。」
「はっ、はい…。」がくがくぶるぶる
「おじゃまします。」

あっ、誰が言ったのかわかるかー？
リトアニアさん→ラトビアさん（この人は分かりやすい）→エストニアさんの順。

「日本さーん、全員来ましたよ！」
「そうですか、ありがとうございます。もう準備はできているので、部屋にお通ししてください。」
「わかりました。」

なんか、誰かの誕生日が来るにつれて、祝ってくれる人が減って来るんだよな…。アメリカさんとかだったら連合枢軸いろいろ来るのに…。

「みなさん、こちらへどうぞ。」

がらっ
ダダダッ
パーン！

（がらっ→ふすまを開ける音
ダダダッ→志希が走る音
パーン！→クラッカーをわる音　　です。）

「エストニアさん、誕生日おめでとうございます！」
「「「おめでとう（ございます）！！」」」

「え…？」

「そうか、今日は僕の誕生日でしたか。当の本人も忘れていたのに、ありがとうございます。」
「いえ、そんなことはありませんよ。」
「そうですよね、日本さん。エストニア、俺もそうだけど、自分が忘れていたのにほかの人が祝ってくれるって、ちゃんと見ていてくれたんだ！　って感じになってうれしいよね。」
「そうですよ。いつも見てますよ。まあロシアさんにたいして震えてるところぐらいですが…。」

「「「う…。」」」

「まあ、今日は楽しみましょう！　ほらエストニアさん、食べて食べて！！　皆さんも！」

「「「いただきます！！」」」

楽しかったとさ。（すいません）

3人が帰って、また日本さんとオレの会話。

「今日は命さん来ませんでしたね…。」

「そうですね…。忙しいのでしょうか（大丈夫ですよ、後でバッチリシメときますから！）。ところで、次の誕生日の方は誰ですか？」

「えっと、たしかイタリア君とロマーノ君ですよ。ちゃんとお呼びしましょうね。」

「はいっ！！」

「3月17日なのでかなり後ですよ。」
「分かりました。」

エストニアの誕生日！（後書き）

今、キャラの誕生日を調べていたらギリシャが自分が知っている日と違っていたので焦った。
次はリクエストの奴書くよ！

…たぶん。すいません、いつも。

雛祭り《前》（前書き）

対して長くもないのに前編にしてごめんなさい。
時間がなかったんだ…。

最近更新してなかった。
また一日遅れの雛祭りだよ…。
ところどころ間違えてるかも。教えてください。
日本の家に電話があるのかは疑問。

雛祭り《前》

「志希ちゃん、雛段に飾れましたか？」
「はい。料理、手伝いましょうか？」
「いえ、大丈夫です。ほかの皆さんを呼んでください。何人でも良いです。」
「分かりました。」

オレがなぜ久しぶりに動いてるのかというと。

今日は雛祭り！！　なんだぜ！

最近、誕生日とかいろいろありすぎて疲れる…。
ま、国とよく会えるのはいいんだが。

で。
オレは、電話がある部屋に入って、まず呼ぶ人を決める。

ドイツさんに龍斗にイタリアさんに雛にアメリカさんにグレッグにイギリスさんにアリアにフランスさんにアングーモア？　だっけ。
中国さんに玲羅にロシアさんに日向に、スペインさんロマーノさんリトアニアさんラトビアさんエストニアさん。
やべエ女子がオレとアリアと玲羅しかいねえ。
ほかにハンガリーさんとかオーストリアさんとかプロイセンとかいろいろ呼びたいけど会ったことないしなぁ…。
そうだ！

ドイツさんたちに、知り合いを連れてきてくださいって言えば、もれなくプロイセンたちが付いてくる！！

さっそく電話。

「もしもし？　ドイツさんのお宅ですか？」
「あ、ああ。誰だ？」
「川中志希です。」
「ああ、日本の家のお手伝いか。で、何か用か？」
「実は、今日私たちの家で雛祭りをやるんです。ドイツさんもどうですか？」
「そうか…。でも申し訳ないが、仕事が溜まっていてな…、終わり次第行くぞ。龍斗は先に向かわせる。」
「そうですか、わかりました。お知り合いも連れてきていいらしいので、どうぞ。」
「ああ。ではまた。」

電話が切れる。
ドイツさん、仕事終わり次第出席。龍斗出席。

「もしもし、イタリアさんですか？　川中志希です。」
「あ、日本の家の子だね～。どうしたの～？」
「今日、家で雛祭りをやるんですけど、イタリアさんもどうですか？」
「え！　うん、行くよ！　雛も連れて行くけど、いいよね？」
「はい。あと、お知り合いの方々も連れてきていただきたいのですが…。」
「分かった～。じゃ、またあとでね～。」

イタリアさん、雛出席。

雛祭り《前》（後書き）

すいません、親にばれそう&時間の関係で今回はここまで！
また次回！

雛祭り《中》（前書き）

雛祭りの中編！
まだ雛祭りとか言わないでくださいね。僕の家では雛壇さえ出してないんですから。
それが影響してるのかも。

雛祭り《中》

あ、言い忘れてたが、電話番号は荷物の中に入っていたいろいろマニュアルにオプションとして付いてた。さて電話電話…。

「もしもし、アメリカさんのお宅ですか？」
「ＨＡＨＡＨＡ！　そうだぞ！　で、誰だい？」
「日本さんの家のお手伝いの川中志「ＯＨ！　君か！　何の用だい？」今日、家で雛祭りをやるんですけど、アメリカさんもどうですか？」
「もちろん行くよ！！　あ、カナダとか連れてきていいかい？」
「はい、どうぞ。」
「じゃ、またあとでな！！！」

……。
…アメリカさん出席。グレッグ不明。カナダさん出席。

（今後アメリカさんにはできるだけ電話しないようにするか…。こっちが疲れるってんだ。）

気を取り直して。

「もしもし、イギリスさんのお宅ですか？」
（他の人のときとおんなじこと言ってら…。）
「ああ、そうだ。お前、志希だろ？　何の用だ？」
「今日、雛祭りをやるんですが、イギリスさんもどうですか？」
「そうか、でも今仕事が溜まっているから、終わらせたら行く。」
「そうですか。お知り合いも連れてきていいと言っていましたので、

誰か呼んでもいいですよ。」
「そうか…、シーランドとかもいいか？　たしか、お前は会ったことなかったと思うが…。」
「大丈夫です。では、また後ほど。」

イギリスさん出席。アリア不明。シーランド君出席。
（子供みたいなやつには君をつけることにした。）

「もしもし、フランスさんのお宅ですか？」
「現在、フランスさんは出かけております～す…、ああ、志希か。何の用？　俺からフランスさんに伝えておくよ～。」
「あー、今日日本さんの家で雛祭りやるけど、フランスさんは来ますか？　って言っといて。帰ってきたら電話くださいって。」
「了解。それ、俺も行っていいの？」
「ああ、いいんじゃね？　知り合いも連れてきてください。だれか。」
「分かった、伝えておくよ。じゃあね。」

フランスさん、なんでいなかったんだ？
来たら聞いてみよ。
フランスさん不明。アングーモア…ってか、これって名前か？　姓の方なのか？　アングーモア出席。

「もしもし、中国さんのお宅ですか？」
「そうあるが。お前誰ある？」
「日本さんの家でお手伝いをしています、川中志希です。」
「あ～～、そうあるか。で、何か用あるか？」
「今日、日本さんの家で雛祭りをやるんですが、中国さんもどうですか？」
「もちろん行くある！　玲羅や韓国たちも連れて行っていいあるな

？」
「はい、何人でもどうぞ。」
「分かったあるよ。じゃ。」

中国さん出席。玲羅出席。亜細亜勢出席。

あれ、電話。フランスさんか？

「はい、もしもし？」
「志希ちゃん？　愛の国のお兄さんだよ～。雛祭りやるんだって？　俺も行くよ。連れていく人はいないけど、よろしくね。」
「はい、分かりました。ではお待ちしております。」
「じゃ～ね。」

フランスさん出席。

「もしもし、ロシアさんのお宅ですか？」
「うん、そうだよ～。君は誰？」
「私は、日本さんの家のお手伝いの、川中志希と申します。」
「あ。ふ～ん、で、何か用かな？　なにも用ないなら切るけど。」
「いえ！　用はあります！　今日、日本さんの家で雛祭りをやるので、ロシアさんもどうですか？」
「分かった、行くよ～。　日向やリトアニアたちもいいよね？」
「はい。」
「じゃあね。」

ロシアさん出席。日向出席。バルト三国出席。

電話で呼ぶのは終わり。

さて、どんな人たちが来るんだ…？

雛祭り《中》（後書き）

気力が続かなくて中編にしました。すいません。

雛祭り《後》（前書き）

雛祭り、もう関係ねーじゃんこれ。
早く終わらせたいけどそうもいかず…。
早くやんないとリクエストの方がっ！　よし、僕ガンバ。

雛祭り《後》

電話をして数時間後。（結構遠いし。）
外がガヤガヤしてきた。

ピンポーン
「おっ、来た。」
誰だろ？　予想は、アメリカさんかドイツさんかイタリアさん。
「はーい。」
オレが扉をあけるとそこには――――
『お招きありがとう（なんだぞ／ございます）！！』
「……わお。」
なんと、オレが今日呼んだ全員が集まってた。
「どうぞ、お上がりください。こちらです。」
がやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがや

がやがやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがやがや
がやがやがやがやがやがやがやがや

…ふう。これぐらいうるさいんだぜ！

米「何してるんだい？」
志「いえ。さて、部屋はこちらですのでどうぞ。」
英「こういう行事のときはいつもこの部屋だよな…。誕生日のときに呼ばれたのもここだったし。」
志「広い部屋の方が大勢入るし便利なんですよ。」
…米とか英とか何かって？　アメリカさんとかイギリスさんだ、分かんなくなりそうだったからつけたらしいんだぜ、作者が。
日「あっ、皆さん！　いらっしゃい。準備はできているので、好きな所に座ってください。志希ちゃんはちょっと手伝ってくださいね。」
志「はい。」

志「……分かりました。……そのタイミングで？　…はい。このお2人ですよね？　…では。」

さて、志希と日本は何を考えているのか！？

伊「どうしたの？　急に俺と雛だけ。」
志「すいません。ちょっとやってほしいことがありまして…。」
伊「なになに～？　おもしろいこと～？」
雛「イタリアさん、つまらないことだったらやらないんですか～…。

」
志「イタリアさんと雛にやってほしいのは、『――――――――――』です。どうでしょう？　やっていただけませんか？」
雛「うん、いいよ～。得意分野だし～。」
伊「おもしろそう～！　俺もやるやる～！！」
志「ありがとうございます。では、これを。右の部屋に日本さんがいますので、やってもらってください。」
伊・雛「「りょうか～い！！」」

さて、オレは戻るとすっか。

……戻ってこなけりゃよかった。
戻ってこなかったらこんな惨状見なくても済んだのに。

まず、部屋はぐちゃぐちゃでボロボロ。イギリスさんと悪友3人が喧嘩でもしたんだろ。
ハンバーガーまみれ。どっから持ってきたんだ多分アメリカさんよ！！
ラトビアさんが気絶してる。ロシアさんだろうな…。
用意しておいた食べ物はオーストリアさんたちで食べてる。ぐっちゃぐちゃになったぞおいっ！！
なんかいつの間にかポーランドさんと…えー、本家で見たことあるぞ。ベトナムさんだ。タイさんは……いねーな。まっ、しょうがない。

ま、他にもいろいろあるがめんどいんで書かねーけど。想像で補って。

志「どうしたんですか、これ…。」
中「あいつらが暴れてるある。全く、いつまでも子供のままあるね。」
玲「中国さんも少し暴れてたんですけどねぇ～。」
中「玲羅、何か言ったあるか？」
玲「いいえ、ですねぇ～♪」

…アレ、玲羅って黒いんじゃね？

日「志希ちゃん、準備できましたよ。」

日本さんが扉を少し開けて合図した。

志「皆さん！！！　ちょっと静かにしてください！！」

オレの大声で全員の動きが止まりこっちを向いた。（ラトビアさんはまだ気絶中。）

志「さあ、お2人、どうぞ！！」

どこからか音楽が流れてくる。（これは日本さんの演出だ。）

英「おっ…。」

西「……楽園やんなあ。」

でた！　スペインさんの「楽園やんなあ」！！　初めてみたぜコノヤロー！！

で、出てきたのは実はイタリアさんと雛。ほとんどの人…いや国？
は気付いてないらしいけど。
ま、確かにあれ女用だし。もともと2人かわいいし。女に間違えるのも無理はない。
普（プロイセン）「ん…？　あのくるんは？」
あ、やべ気付かれた。くるんか。忘れてた。隠しときゃよかった。
普「もしかしてイタちゃんか！　だったらもう1人はお手伝いの雛だな！　そうだろ！　称えろ！　崇めろ！　俺に跪けー！！」
だれがするか。
志「はーい正解です、おめでとー。（棒読み」
独「兄さん…。」

作者がめんどくなったんでここまでだ！
全員帰ったぜ！　命は後からきたんで殴る。いやー神を殴るって清々しいな！！

雛祭り《後》（後書き）

すいませんでした。

そして九條さん！
せっかくリク頂いたのに使ってなくて申し訳ございません！！
畜生過去の自分め…。というわけで修正しました。（２０１１年３月２９日）
でもただ登場してるだけ…。会話とかは全くしてない。こちら側の時間がないので…、これでお願いします・・・。すいません、ほんとに。

イタリア兄弟おめでと！（前書き）

遅れました！

イタリア兄弟おめでと！

「兄ちゃ～ん、Ｂｕｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅａｎｎｏ！」
「ロマーノさん、Ｂｕｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅａｎｎｏ！」
「…Ｂｕｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅａｎｎｏ」

ここはイタリア兄弟の家。
そして今日は、この兄弟・ロマーノとヴェネチアーノの誕生日、３月１７日です。

「も～っ、兄ちゃん、もうちょっと盛り上がろうよ～。」
「いくら誕生日でも自分家で盛り上がれねーよ！　それに、お前日本の家に招かれてんだろ？　早く行ってこいよ。」

そう、イタリア兄弟の弟・ヴェネチアーノは、同じ枢軸の仲間である日本に、誕生日パーティーに招かれているのです。なぜ主役のイタリアでやらないのかというと、当のヴェネチアーノが日本に頼みこんだからです。

「うん、行くけど、俺が行くなら同じ誕生日の兄ちゃんもでしょ！
　せっかく招かれてるんだから！」

ヴェネチアーノが持っているのは、日本からの招待状です。中にはこう書いてありました。

『　イタリア君・ロマーノ君へ

3月17日、私の家であなた方の誕生日会を開きます。
どうぞおいでください。
ちゃんとプレゼントも用意してありますよ。
でも中身は秘密です。来てからのお楽しみということで…。』

「ほら兄ちゃん、早く！」
「うるせーな！　分かった、行くから離れろ！」
「やったー♪」

無事日本の家に着いたイタリア兄弟。とイタリアのお手伝いの雛。
ここには、日本とお手伝いの川中志希がいます。
ロマーノは、前来た時はあまり話せなかったので、今日こそは！
と思っていました。

ピーンポーン

「はい。」

タタタタッ

出てきたのは、川中志希の方でした。
そういえば応対はこいつだったなと、ロマーノは思い出しました。

「イタリアさんに、ロマーノさんですね？　どうぞおあがりください。」
「あ、ああ。」

歩きながら、ヴェネチアーノは聞きました。
「志希～、日本は～？」
「部屋です。準備をしていましたが、もう終わっていると思います。」
「ふ～ん。」

がらっ

「「「「「「「ロマーノ（さん）、ヴェネチアーノ（さん）、誕生日おめでとう！」」」」」」」

「みんなありがとーっ！！」
「…おう。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「日本〜、プレゼントって何〜？」
「お、おいヴェネチアーノ！」
「ふふ、どうぞ、これですよ。ロマーノ君もどうぞ。」
「やったー！　ありがとね日本！」
「…あんがとな、日本。」

イタリア兄弟は家に帰ってきました。

「さて、日本に『これは家に帰ってからですよ。』っていわれてたプレゼントをあけるぞー！」
「おー……。」
「よ〜し、えーっと…。」

きれいにラッピングされた少し大きい箱を開けてみると、日本のおやつの『マンジュウ』というものが入っていました。

「やった！　兄ちゃんは何入ってたの～？」

「…シャーペン。」

ロマーノの箱は小さくて…そう、ちょうどペンなどはぴったり入るサイズのものでした。

「わっ、トマト！？　これ、もしかしてスペイン兄ちゃんに教えてもらったんじゃ…。」

「……ああ、スペインからって書いてある。」

「良かったね～！！」

わあわあいいながらも、ちゃんとヴェネチアーノはマンジュウを食べ、ロマーノはシャーペンを使いだしました。

どうやら、喜んでもらえたようです。

よかったですね。

イタリア兄弟おめでと！（後書き）

今回、ちょっとだけ書き方を変えてみました。

あと、感想ください！　お願いします！

待ってます！

ワオ、この話終わりだよ。（前書き）

なんか新しいの書きたくなったんです。書くかは分かんないけど前向きに考えてるんだ。
でもこのまんまじゃ僕はできないので、結構進んだと思われるこの話を終わりにさせることにしました。
いや、まあテンションは変わらず行くんで安心してね！

ワオ、この話終わりだよ。

……。

オレは前から普通に過ごしてきたはずなんだ。

オレの前に前の世界のやつらが一気にドドーン！！　と落ちてくる理由なんかないんだ。

「え――――…？」

いやマジで勘弁なんでこいつら来たんだよオレ死んでからここ来たんだけどじゃあこいつらも死んだってことかいやこんな一気に来るわけはねーよなでも命ならやりそうだあーあのアホ神何やってんだ後でシメてやるでもなんでこんなに来てんだ命のヤロー何かくだらねぇことでも考えてやがんのかいやあいつは万年くだらねえから特別ってわけでも「おっ、志希ジャン。何着物着て掃除なんかやってんだよ、こんなとこで…アレ、ここどこだ？」

「うるせえよ、暁！！」

そう、こいつはオレのクラスメイト？だった？火野（ひの）　暁（きょう）。（違う作品から持ってきたぜ！）

ここには来ちゃいけねーんだ…。

「なんでいるんだよ、俺の親とか他のやつらまで連れてきやがって…。」

「え？　うぉっ！！！　ホントだ！　なんでいるんだ！！？」
「お前が連れてきたんじゃねーのかよ。」
「んなわけねーだろー。で、ここどこだ？　妙にヘタリアの世界に似て…。」

ギクッ！！！！

「あ、お前知ってんだろ。教えろ。」
「…待ってろ。」

ここから命との会話スタート←

（おいこら命、なんかオレの前の世界のクラスメートとかがいるんだが。どうなってんだ。早くこっち来いや。）
『お、やっぱ来た？　今行くから待ってなー。』
（話終わったら来いよー。ちょーっとお前にはお仕置き（という名のリンチ）が必要らしいからなぁ？）
『ゾーッ）は、はい…。』

「…フッ。」
『よう志希待ったかー。』
「待ちまくりじゃボケぇ！！！」ボカッ！！！
『ぐおっ…、』
「おーう来たか命ー。さっさと話して殴られて楽になれー、いっそのこと自分の世界に永久にいてもいいんだがなぁ？」
『えっちょっそれだけはやめて、マジで。うん。だからその持って

いる大きくて人一人殺せそうな石を下ろしてくれないかなー？』

現在のオレの装備品▼

頭・なし
体・着物
手・石（岩とも言う。）
足・草履

石　を　下ろし　ますか？

・はい　？
・いいえ

「チッ…。」
『ほっ…。　おーいにほーん、ちょっと来てくんねー？』
「おい、なんで日本さんが関係あるんだよ？」
『だって、これはお前がこの世界に留まるかどうかを決めるんだ。日本が関係してなくて誰が関係すんだ。』

その時暁はこう思っていた。

（な、何ぃ！？　日本だって！　もしかしていやもしかしなくてもヘタリアだろー。じゃあここはヘタリアの世界ってかうわー、トリップしたのかこれえーマジかよ～～～～～～～～～～。↑延々と続く。）

…関係ないが、暁は女である。ものすごく関係ないが。

「はーい、どうしましたか命さん…あら、こんなに人が…。皆さんどうなさいました？」

『日本日本！　今から、志希の本当のことを話す。驚かないで聞いていろよ？』

「あら……はい、分かりました。といっても、私はもう爺ですから。そんなに驚くことなどありませんよ。」

『あーそうか。じゃあ話すぞ。その辺のクラスメイトだとか親とかも聞いとけ。――――』

そして命が話したのは、こんなことだった。長いから箇条書きで。

・自分・命が全世界の神だということ。
・オレ・志希が死んでこの世界に来たこと。
・他のアリアとかのやつらも同じような境遇だったこと。アリアたちは全員帰っているらしい。
・今日は、俺が自分の本当の世界に帰るか（なぜか、あっちの世界ではまだ俺は死んではいないらしい）、この世界に留まるかの大事な日だということ。
・クラスメイト達を呼んだのは、オレがどちらに行く、留まるのかを迷わせるため。なぜかは知らないが、そっちの方がいいらしい。

…とまあこんな感じ。

『――っつーこった。さあ志希、お前はどっちを選ぶ？』

とたん、暁たちがうるさくなった。

「当然こっちだよな、志希！　お前がいないと楽しくねーんだよ！
和も言ってやれ！」
「そうです。志希、こちらに戻ってきてくださいませんか？」
和。本名は二宮（にのみや）　和（かず）という何とも和風な名前をしている。志希と和はオレの親友だ。
だが。
「もうオレの答えは決まっている。」
「オレは、」
「……この世界に残る。」
『…フフッ。』
突然命が笑いやがった。だが今は機嫌がいいから殴らずにおいてやる。

「なんだよ。」
『いや、お前が予想通りの答えを言ったからな。』
むかっ
「るっさい年齢不詳若作り爺め。」
『それどういう意味…ぐはっ！！！』
殴りはしないが蹴りはする。
「というわけで、命が連れてきたお前らは全くの無駄骨だったたっつーこった。さー命、早く全員帰してやれ。」
「「ちょっと（待った・待ってください）！！！」」
……ん？
「どーした2人とも。」
「ここってヘタリアの世界なんだろ！？　オレも居たいぞ！」←暁
「おもしろそうなので私も居たいです！」←和
『だってよ、どうすんだ志希。』
「いーんじゃねーの、1人だけってのもつまんねーし。」
「「やったぁ！！！」」
はいそこでものすごい盛り上がってる2人は置いといてー。
「命、早く帰してやれよ。」
『はーい。』
命が目を瞑る。

とたん、帰る奴らの足元が光りはじめ、だんだんと薄くなり、ついにはすべて消えた。

『よし、これでいーだろ。ちなみに、お前らはいつでも帰れるからな。』

「ああ。」

「じゃあ、早く家へ入ってください…。老体にはこの寒さはきついです…。」

「あー！！　日本さんすみません！　全員早く入れ！」

「「『はーい…。』」」

そのあと命は帰り（殴ったりはしなかった）、暁と和は隣の部屋で過ごすことになった。

夕食も食べて、布団の準備をしているとき、日本さんが言った。

「ありがとうございます、志希ちゃん。もともとの世界も大切なはずなのに、こんな私といることを選んでくださって…。」

「そんなことないです！　あっちの世界ではもう自分は死んだと思っていたので未練はないですし、何より、日本さんとの生活が大好きですから！！！」

「…ほんとうに、ありがとうございますね。」

ワオ、この話終わりだよ。（後書き）

ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0113q/

日本さんのお手伝い！

2011年4月6日12時49分発行